

サトリの
ココロ

[月1連載]

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
お坊様に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗妙厳寺住職、大多喜南無道場主
野坂法行さん

第3回

「生きる」とは何か？ 答えは生活や遊びの中にある



のさか・ほうぎょう 1947年生まれ。1969年、立正大学仏教学部卒業。
大本山池上本門寺布教部勤務の後、辻説法などを行う。
1983年に千葉県妙厳寺の住職に就任すると同時に、「大多喜南無道場」を開設。
現在は大本山池上本門寺布教部執事も務める。著書に『山寺留学』（水書坊）など。

れば……。そんな思いから、自然に恵まれた土地で行法（宗教体験）をする「大多喜南無道場」を始めました。約28年前のことです。

山寺での生活体験で 成長する子どもたち

南無道場の活動は、子どもたちにお寺での生活をおして生きる意味を考えてもらうというものです。昔、こんな話がありました。子どもがデパートでカプトムシを買ってしまった。そのカプトムシが死んでしまったとき、子どもは母親に「カプトムシの電池が切れちゃった。電池を替えて」と言ったというのです。命の認識がそこまで貧しいものになってしまったのか？……愕然とした私は、春休みや夏休みに自然や生活、宗教を体験するための場として「山寺留学」を始めました。

山の中のお寺です。とても静かで、その沈黙がうるさいほど（笑）。子どもたちは最初こそ慣れない環境にとまどいますが、すぐに互いに打ち解け、新しい体験を楽しむようになります。ここでは年上の子が下の子の面倒を見るのが当たり前。きちんとした縦の関係をつくめることは、子どもたちのトレーニングにもなります。

お寺ですから、朝のお勤めでお経を読んだり、夜の瞑想で心を沈めたり、食事を通じて命の大切さを感じたりといった宗教的修行もあります。一方で、ナイフを使って



春と夏に行われる、子ども向けの山寺留学。朝や夕方に住職による法話も。

箸を作ったり、薪割り、食事作り、風呂焚きといった生活体験、水遊びや凧揚げなどの遊びと、普段はできない体験がたくさんあります。ここでの唯一のルールは、「やったことない」とは言わないこと。初めてでも自分でやることで大きな自信になり、ステップアップした気持ちになれるのです。

親は過保護にならず 子どもの自立を見守るべし

送り出す親としては、心配なことも多いかもしれませんが。ときにはケガをすることもありますが。でも私はこう言います。「たくましくなっていくための授業料だと思ってください」と。

子どもは自分で体験して学習していくのです。自分でやることで生活力がつき、賢くなる。ここでは人間の営みの原点が学べます。生きるとは何か？ 自分の命とは？……原点に立ち返ることで、自分の考えや個性を持って生きてほしい。それが私の願いです。